

二 勝山町域の道

香春道と椎田道

香春町の職人町東入口に「従是採銅所迄壹里半、従是久保新町迄壹里」という里程石標が立っている。ここは、香春町の東の追分であり、この地点を「道標の辻」、「上の辻の道標」、地元の人には「みちしるべのつじ」と呼ばれている。「久保新町」とは、勝山町の久保新町のこと、この香春町の職人町東入口の里程石標は、香春と京築を結ぶ追分道の起点でもあった。

この「香春―椎田道」は、香春（宿駅）―鏡山―上野―新町（宿駅）―上久保―中久保―下久保―天生田―惣社―国作―徳永―弓ノ師―築城―椎田（宿駅）のコースをたどり、九州の代表的な脇街道「豊前道」（豊前小倉と豊後府内を結ぶ主要幹線）に交差する重要な道筋である。

「中津御城下道筋図」（福岡県立糸島高校所蔵、図5―12）に「○博多―三リ半―○篠西木―市坂・四リ―○飯塚・峠・五里半―○香原（香春）―二リ―○上新町―四里―○椎田」とある、博多と椎田を結ぶ道筋のうち「○香原（香春）―二リ―○上新町―四里―○椎田」の部分が「香春―椎田道」である。なお「上新町」とは、上久保新町のことであり、勝山町の久保新町である。

香春―椎田間六里（約二四キロ）のおよそ中間点に位置する

あもうだ
天生田（行橋市天生田）の交差点隅に、石の道標と「道路標柱」の説明板が立っている。説明板には、次のように書いてある。

行橋指定（民）四号

道路標柱

指定年月日 昭和四十八年七月一日

江戸時代に建てられた道路標柱で、花崗岩の四角柱。高さは一三六センチ、幅二八センチ。「従是東椎田道」、「従是南石坂越彦山道」、「従是西香春道」、「従是北小倉」と四面に刻字されている。東方の椎田から西方の香春に通じる道は、往時の豊前国府から七曲峠を経て香春に通ずる官道沿いの古道でもあったし、今川沿いに英山街道が通じていたことをこの道しるべは教えてくれる。

行橋市教育委員会

この説明板で、「東方の椎田から西方の香春に通じる道」、「往時の豊前国府から七曲峠を経て香春に通ずる官道沿いの古



写真5―17 「従是久保新町迄壹里半」の道標
（香春町職人町）

道」と表現されている道は、「正保国絵図」や「豊前小倉領全図」で図示されている椎田

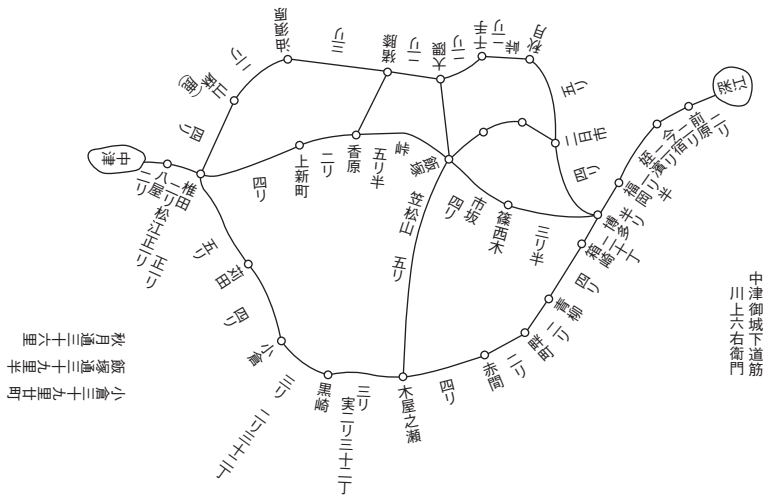


図5—12 「中津御城下道筋図」(福岡県立糸島高校所蔵)

築城―別府―徳永―田中―国作―天生田―大谷―西谷―新町―上野―香春のコースをとる道のことである。椎田駅と香春駅を結ぶルートのうち、椎田―築城―別府―徳永―田中―国作を経て天生田に至る道は、石の道標によると、「椎田道」と呼んでいる。そして、天生田―大谷―西谷―久保―新町―上野―鏡山―香春のコースを「香春道」と呼んでいるのである。

新町宿駅

この「香春道」のうち、新町村(勝山町松田)は、「豊前小倉領全図」(図5—11)でも明らかなように、宿駅であった。元和八年(一六二二)の豊前細川期の『小倉

藩人畜改帳』には、新町村はみえず、「正保国絵図」に「上久保ノ内、新町」とみえる。正保期(一六四四―四八)は上久保村(千石余)に含まれており、村名は記されていない。香春町の職人町東入口の追分に、「従是久保新町迄壹里」という里程石標が立っているように、新町村が「久保新町」とも称された理由は、上久保村のうち、新町であった、という経緯があるからである。



写真5—18 道路標柱とその説明板(行橋市天生田)

元禄十四年(一七〇二)の「豊前図」(国絵図)では、「新町村 九十五石余」と、村名が記されており、上久保村の村高は「七百八十二石余」となっているので、正保期から元禄期までの、約四〇年の間に、新町村は、上久保村から分立したのである。

貝原益軒の『豊国紀行』元禄七年(一六九四)五月五日の条に「上野新町は七曲嶺を東の方に下だりつくして上野村のなを東に有馬駅也。香春より一里十七町有」とある。このように、新町村は「上野新町」(慶応四年「辰御用日記」

永井家文書でも）とも称され「馬駅」（人馬継立所、宿駅）であった。



写真5—19 「從是東椎田道」「從是南石坂越彦山道」「從是西香春道」「從是北小倉道」と4面に刻まれた石の道標（行橋市天生田）

延享三年（一七四六）一月十六日の「豊前国小倉領郡村高辻帳」（半田隆夫校訂『豊津藩歴史と風土』第一輯、発行豊津町所収）に「一、高九拾五石三斗九升七合 新町村」・「一、高七百八拾貳石貳斗七升五合 上久保村」・「一、高三百貳拾九石八斗五升三合 上野村」とあり、新町村は、上久保村からも、上野村からも独立した村であるのに、貝原益軒の『豊国紀行』でも「上野新町」と散見されるのは、なぜだろうか。

安永二年（一七七三）の「大庄屋・小庄屋」（豊前市、清原家文書）に、

京都郡

大庄屋 久保小右衛門
子共役 同 健 吉



写真5—20 宿場「久保・新町」の景観（勝山町新町）

とある。新町と上野村の庄屋は、市左衛門が兼帯していたので、新町村は「上野新町」とも称されたのかもしれない。

（以下略す）

新町	市左衛門
上野村	右同人
下田村	傳四郎
菩提村	右同人
御手水村	作兵衛
圖師村	右同人
上久保村	七左衛門
中久保村	源 藏
飛松村	右同人
下久保村	嘉四郎
平尾村	右同人

十八世紀の新町商人は、相当に裕福であったようである。新町には、插花真古流の名家があった。初代

南寿庵花敬、通称木村徳右衛門は、宝暦十四年（一七六四）六月、一国庵花頭（開祖同仁斎一花）足利義政より伝統第十八代より真古流の名称を受け、花道宗匠として当地に招かれ、代々この地にあつて花楽堂を称し、九代雪蹊、通称木村則英に至っている。

江戸中期から明治期の町並みには、この花楽堂をはじめ、米屋・麴屋・綿屋・酒屋・紺屋・櫛蠟工場・英彦山ガラガラ工場・大工八軒・屋根師三軒のほか、遊女屋も裏町に栄えた。

明治五年（一八七二）二月の「人足賃銭請取帳 中原嘉左右」に、

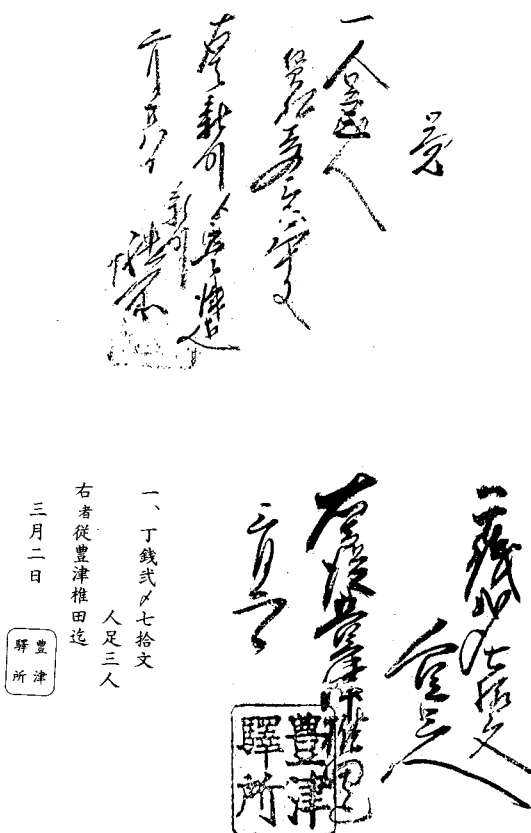


図5—13 人足賃銭請取帳—明治5年—
（北九州市立中央図書館架蔵）

「自文久元年明治五年人足賃銭請取帳」の中から、その一部を抄録した。帳簿には、大里・小倉・荻田・行事・新町・椎田・豊津・松江・八尾などの人馬継立場（宿駅・継所・駅所・問屋）が散見する

覚

一、人足三人

賃札壹ノ三百八十文

右は新町より豊津まで

二月廿八日

新町

継所 国

とある。当時、新町継所（駅所）から豊津駅所（継所）までの人馬継ぎ立て費用のうち、人足一人分の経費は錢四六〇文であつた。

篠原街道

行橋市の行事—草野—吉国、そして勝山町の黒田—松田、香春の岩原口—高野口—香春のルートを通る国道二〇一号は「篠原街道」とも呼ばれている。現在、勝山町と香春町が新伸哀トンネルで結ばれているが、近世の町境は、七曲峠で結ばれていた。

宝暦十一年（一七六一）の幕府巡見使一行は、行事—草野—吉国—黒田と、「篠原街道」を通り、更に新町—七曲峠—鏡山を経て香春へ行ったが、二八年後の、寛政元年（一七八九）の荻田—黒田間の巡見使コースを、藩は宝暦十一年とは異なる別ルートに変更しようとした。

その理由は、「寛政巡見上使一件」によると、

数年通路これなき儀にて、此度取繕い候は、新規同然の儀にて御座候。

以前の通取繕い、馬・駕差し支えこれなき様にいたし候得ば、田島にも

少々宛の障も出来、就中三ヶ所臨時の掛橋も御座候て、余計の人遣いに

相成候。

というものである。

また、同史料に、

一、京都郡の内、行司村（事）より同郡久保村迄の間、田舎道にて御座候事。

とある。つまり、この「篠原街道」は、常日ごろは人通りが少なく、荒れてしまい、道路整備をするとすれば、新規同然の道普請となり、馬や駕籠が差し支えなく通れるようにするには、田島を削らなければならない。巡見使一行が通るとなると、臨時の橋を三か所架けねばならず、余計な人的動員が必要になつてくる、というのである。

しかし、幕府巡見上使（正使）池田雅次郎政貞は、この藩の申し出を、きっぱり断つた。そして、結局、宝暦十年と同じコース（篠原街道）を通れるように、藩は道普請と三か所の仮橋架けを行った。

三 公称街道名と人馬賃銭

公称街道名

天保二年（一八三一）、幕府は、諸大名に対し「郷帳」を作成して幕府勘定所へ提出する

ように指示し、同五年（一八三四）十二月には、「天保郷帳」を完成させた。そして、翌六年（一八三五）十二月二十二日、諸大名に国絵図の作成を命じた（「本丸廻状留」）。正保、元禄の場合は、諸大名に、国絵図を実際に作成して提出させたが、「天保国絵図」の場合は、幕府が、元禄図を短冊型に何葉分かに切断し、淡彩で薄紙の写しにして諸藩に渡し、元禄図と変わっている部分だけを紙に書いて添付し、訂正して提出させた。幕府は、これをもとにして自ら国絵図に仕上げた。このようにして、天保九年（一八三八）五月には、「天保国絵図」がほぼ完成した。

この天保図の作成過程で、同七年（一八三六）八月二十三日、幕府勘定所は、在府の大名諸家留守居役を招集し、領内の五街道、脇往還筋の人馬継ぎ立て・宿駅・人馬賃銭などを調べ、雛型に沿って、書付を提出するように指示した。

六角文書群（九州大学文化史研究施設所蔵）の中に、次のような「脇往還筋書附」がある。多少長文になるが、近世の交通史料としては貴重なものであり、全国各地の脇往還が、公称で何と呼ばれたか、その実態を幕府レベルで調査した雛型であるので、次に紹介しておこう。

本紙美濃紙

何の誰領分

脇往還筋書附